

TOPIC

留学のすゝめ

ジョン ドーラン
商学部准教授 John A. Dolan

学生の時、古代の歴史を勉強していたら世界のいろいろな文化に興味を持ち始めました。メンフィス大学での指導教授から“一年ぐらい海外留学したら歴史学にもっと実感が湧いてきますよ”と助言をいただきました。二十歳前の私にとっては夢のまた夢の話でしたが、その先生はたまたま大学のフルブライト奨学金プログラムの担当者でもあり、プログラムに参加している世界中の大学を紹介する資料にとりあえず目を通すようにと言われました。遊び半分の気持ちで冊子をめくっているうちに、いろいろな国での自分の姿を想像し始めました。留学なので大学の教室での勉強のはずなのに、浮かんでくるイメージは、初めて行く街を知り尽くし、その特色を堪能するシーンばかりでした。例えば、パリなら外のカフェに長時間座ってコーヒーをすすりながら人と議論したり、ギリシャならプラトンの本を脇に、ソクラテスが人を捕まえてよもやま話(哲学)をしていた広場を歩いたりする感じです。

メンフィス大学でラテン語とフランス語を勉強していたのに、案内の冊子に載っていた大学の中から一番惹かれたのはなんとエジプトの大学でした。カイロ・アメリカ大学ならアラビア語ができなければ英語でも授業が受けられるという条件だったので、ロマンを追うならピラミッドの近くがいいなといった無鉄砲な計算でした。ところが、大学3年の時にメンフィス大学に来ていた中央学院大学の研修団の補助学生として選ばれ、興味の対象がすっかり日本に切り替わりました。留学が大学院の時まで先送られ、結局はエジプトではなく日本になりました。卒業して10年、カイロを訪れる機会があり、ピラミッドや博物館巡りはもちろんですが、(アラビア語が読めないのに) ブックフェアや街中の寺院などに行って一般庶民に混ざり、なんとなく現地の生活を垣間見ることができました。ちょっとした縁で人生は大きく変わることに領きました。

空想家はさて置き、昔も今も留学する動機は様々です。明治時代に国家戦略的に派遣されたエリート層からの学生や官僚はたくさんいましたが、新しい文学、芸術、宗教などを求めて行った人

もいました。戦後では私費やフルブライト奨学金などで渡った人は一気に増え、孫正義(ソフトバンク会長)や東京都知事の小池百合子(留学先はなんとエジプトのカイロ・アメリカ大学!)のように民間で成功した人は珍しくなくなりました。ところで、現在は、孫さんの経済学と小池さんのアラビア語学のような特定分野を持たない人でも留学に挑戦する人は多いです。その中で英語の短期研修を目的とした1週間から4週間ぐらいの留学が一番普及していると言われています。目的国の人気順としてはアメリカ、オーストラリア、カナダ、イギリス、ニュージーランドが定番ですが、最近では近場のフィリピンでの研修生も増えているそうです。2020年から実施される学習指導要領では、小学校の5年生から英語が「教科」として登場することが決まっています。私は日本人の英語を長年見てきましたが、個人差はあっても一般的には英語に対する抵抗が明らかに減っています。今の小学生が就職活動を始めるところでは英会話ぐらいの力は必須条件になると十分考えられます。

短期の語学留学の目的は、会話力(聞き取りとしゃべり)を伸ばすことです。受講生は世界中から集まるので唯一の共通語である英語で授業が行われ、学生同士でも英語を使わないとコミュニケーションが取れない場合が多いです。これに加えて、ホームステイ先や国際的な寮で生活すると、朝から晩まで英語に浸っているので、知らないうちに英語の主なパターンが身につき、気が付いたら反射的に使っているようになります。語学のスキルの習得のほかに、異文化を体験することで「うちから」の視点が得られます。これは、相手の立場を考える場合に非常に役に立つものとなります。

留学から帰ってきてその語学力や新しい感覚を大事にすれば、長い人生の中で一つの糧になることでしょう。福沢諭吉ではないですが学問もさりながら留学もおすゝめ!

みなさんは知っているのでしょうか？中央学院大学では交換留学制度があります！相互交換留学生制度を持つ姉妹校として、台湾の淡江(タンコウ)大学と韓国の京畿(キョングィ)大学校があります。そのほか、「外国文化研究」という授業ではメンフィス大学(米国)とワイカト大学(ニュージーランド)にて「短期語学研修プログラム」を設けております。本学学内ではほぼ毎年、交換留学生の募集が行われており、先方の大学からも交換留学生を本学へ派遣されています。姉妹校で取得した単位は、本学の単位として振り替えることもできます。

一方、中国・韓国・ベトナム・モンゴル・スリランカ・サウジアラビアなどから、約190名の留学生が在学中です。よって、キャンパスにいながら留学生と国際交流ができる機会が沢山あります。外

国人留学生と積極的に交流すれば、異文化の背景を持つ人々の考え方を知ることができ、学内キャンパスライフが貴重な体験になるわけです。必ずしも英語が得意でなくても、日本語で話せばいいです。自分から一歩踏み出せば、本学のキャンパスにいながら海外留学の疑似体験ができますので、是非チャレンジしてみましょう。

これからの高度情報化社会においては、人工知能(AI)の進歩

に伴いグローバル化が一段と加速していくでしょう。国際的な視野をもち、異なる価値観や環境に対して柔軟に対応・適応できるクリエイティブな人材が求められます。これから実社会での活躍に向けて、みなさんには、在学中に世界にもっと目を向け自分を鍛えておくことを期待します。



新入留学生歓迎会にて

先日、国際学会に参加するためにアメリカへ行ってきました。アメリカのレストランで料理を注文しようとしたところ、一つ予想外の問題にぶつかりました。レストランのメニューの多くが文字のみであり、写真がなかったのです。日本で料理の写真を見ながら注文することに慣れていた私は大変困惑しました。そしてこの小さい「カルチャーショック」を通して、日本では当たり前の「常識」が他の国に行けば常識でなくなることもあるのだと実感しました。

日本は便利な国だとよく言われます。例えば、レストランのメニューには写真があり、レストランの入り口のショーウィンドウには実物を模したサンプルがあります。

日本語がわからなくても注文ができます。社会はどんどん便利な方向へと発展していきます。便利な生活自体は決して悪いことではありません。しかし、「便利」である現状に甘んじると、別のライフスタイル、生き方に対する違和感や自文化中心的な考えが生じやすくなります。このような偏見はどう防ぐべきでしょうか。

中国北宋(960-1127年)の詩人、

蘇軾(ソショク)の次の漢詩が、私たちにヒントを与えてくれます。

「不識廬山真面目、只緣身在此山中」

廬山は数多くの雄大な峯がそびえる中国の名山です。蘇軾は、廬山のど真ん中に自分が置かれているので、廬山の全貌(真面目)を知ることができないことを嘆きました。この漢詩は、外部に出てみてはじめて物事を客観的に評価することができるという意味で、中国人にしばしば引用される有名な詩です。

北宋の時代には飛行機がなかったため、上空から廬山の全貌を俯瞰することができませんでした。しかし、今は交通手段が発達しており、数時間あれば、廬山どころか、中国の各地、韓国、ベ

トナムなどの国々へ行くことが可能になっています。これらの国々は地理的に日本の近くにありますが、日本と異なる文化を多く持っています。これらの異文化を楽しく観察することを通して自国文化に対する理解力を深め、様々な文化に対する包容力を持てるようになり、心も豊かになってくると思います。世界へ飛び出していきましょう！



廬山(廬山市人民政府HPより)

初めて韓国という国を知ったのは、幼稚園生の頃。^{おきななじみ}幼馴染に韓国人の知り合いがいて、韓国という国を知った。その当時は、まだ幼い頃だったので韓国という国があるということぐらいしか知らなかった。大学に入り、シラバスを見たらコリア語という科目があり幼い頃から親しみがあつた韓国。その韓国で使われている言葉を、自分で読んでみたいと思いコリア語を履修した。

その時は、ただ講義を受けるだけで留学をするという目的はなかった。交換留学があるのは知っていたが、自分には留学とは縁がないと思っていたからだ。交換留学に行ってみたいなとほんの少し思っていたが、なかなか行く決断をできないでいたが、両親からの後押しもあり留学に行く決断をした。

京畿大学では、語学学校(語学堂)で韓国語の授業と大学の授業を受けた。語学学校ではレベル別に分かれていて、1級から6級までレベルがあがるにつれて、どんどん難しくなっていた。授業の時間は、午前のクラスが9時から12時50分午後のクラスは13時から16時50分までであった。語学堂に通っている学生の大半は、中国とベトナムからの学生だった。その他は、ロシア、カメルーン、ウズベキスタン、モンゴル、日本からの留学生だった。

授業は、単語の意味、文法、本文の音読、リスニングを毎日行う。他には、学期ごとに1回、文化授業がありミュージカルを見に行ったり、海に行ったり、遊園地に行った。最初の頃は、韓国語の音に慣れない所があつたが、ある時から、韓国語をスラスラと聞き取れるようになっていた。

韓国語に慣れる為に毎日、学校で配られたリスニングのCDを聞いたり、ドラマを見たり、音楽を毎日のように聞いていた。

クラスでは、私以外に日本人がいない事がとても良かった。同じ国の人がいたら母国語で話してしまうが、いなかった為、常に韓国語を使っていた。私は、この1年間の交換留学で成長したと思う。留学前、私は自分からは発言をすることをなかなかしなかったが、韓国でも日本と同じように過ごしていたらとても困ったことが多々あり、自分から発言する力が身についた。今まで、相手に伝わらなかつたら恥ずかしいという気持ちがあり最初の頃はなかなか発言出来なかつたが、勇気を出して少しでも話した時に伝わり、そこで不安が消え、少しずつでもいいから発言していこうという気持ちになった。勇気を出して交換留学に行つてよかったと言える1年間だった。

一昨年、2年生の秋セメスターから3年生の春セメスターの約1年間を使い、ニュージーランドへ語学留学をしました。留学した理由としては多くのグローバル企業が存在する中で、今後語学力が必要になると考え、留学をすれば英語の勉強をしつつも、異文化交流もできると思い、留学することにしました。実は大学を通じて交換留学をしようと思っていたのですが、時期の問題で受入れられず、自主留学となりました。

私が通った学校はKaplanというオークランドの中心地にあります。授業料とホームステイ代込みで140万円ほどかかり、現地ではアルバイトはしていなかったため、毎月10万円の仕送りで食事代、ホームステイからシェアハウスに引っ越したためその分の家賃などを支払いつつ生活していました。

留学前に英会話学校に通うなどして準備をしていたのですが、最初の1~2週間はホームステイ先の家族との会話でも、学校での先生や学生の会話がまったく聞き取れず、返事もろくにすることが出来ませ

んでした。

しかし、ホストファミリーや友達との日常会話を通じて、listeningとspeakingの勉強になりました。また、学校で勉強した英単語や英文法をすぐに実践で使えるので、覚えるのも日本で勉強するより格段に早かったと思います。

留学後では、語学力を維持するのが難しいと言われているため、帰国後はすぐに英語学校に通い始め、自宅では単語の勉強などを続けています。大学の授業でも外国語講読といったビジネス英語を使った授業を取ったり、大学の授業や家での空いた時間などを駆使して語学力の維持をしています。

今回の留学を通じて沢山の人のために助けてもらっていることが分かりました。急な留学にもかかわらず、学費や諸費用を快く出して下さった両親と、家族同然のように接してくれましたホストファミリーです。普段の生活でも感謝の気持ちを忘れず、より充実した大学生活を過ごして、社会人としてのいさぎよい第一歩を踏み出します。



留学直後、学校の前で



研究テーマは、これまで一貫してソフトウェア会計研究です。1998年に「ソフトウェア会計基準」が設定されましたが、ソフトウェアが要件を満たせば無形固定資産と認める画期的なものでした。それから20年が経過し、ソフトウェアの利用は更に拡大し、自動

運転車が近い将来実現する見通しとなっています。また、システムのトラブルが社会的に大きな影響を及ぼし、情報セキュリティが重要度を増し、2020年学習指導要領では「情報I」（プログラミング等）が高校の必修科目になろうとしています。こうしてソフトウェアが技術的・社会的に進化し続けているので、それに対応し会計的事象としても的確に把握すべきことが多々あると思い、研究を続けています。

ソフトウェア会計の研究では、会計学はもとより、ソフトウェア

の理解が不可欠です。ソフトウェアを企画―開発―運用―保守―廃棄というライフサイクルに沿って総合的に捉えること、関連して、一般的に注目されるプロダクト（成果物）に留まらず、併せてプロセス（制作過程）という側面からも捉えることを認識の基軸に据えることとしました。それらの成果を、研究論文に纏めてきました。今後も、研究を続けようと考えています。

近年は、関連分野として、コンテンツ会計並びに研究開発会計にも取り組んでいます。これらを含む無形資産会計を研究領域としています。

教育歴としては、簿記・会計の講義を足掛け5年にわたり担当してきました。受講生には簿記検定の資格取得を勧めています。合格者が出た時は本人共々、大変嬉しく感じました。学生にはアドバンテージ（将来を切り開く何らかの優位性）の獲得を唱導し、学生個々人に適った支援をすることを心掛けるようにしています。それは、本学の「建学の精神」にも沿っているものと考えています。

編集後記

本号のメインアイディアとして、「海外へ(abroad)」、「在学中の留学」などを取り上げました。平成の30年を振り返ってみると、2004年の大旨80万人を境に海外留学生が減少しているかのように見えるが(下図 黒色の折れ線)、学生交流に関する協定などに基づく留学生の数は確実に増加していることが分かります(赤色の折れ線)。将来、「語学力」を前提として「多文化の理解力」のある人材を求める企業ニーズは高まるでしょう。

日本経団連の調査(2015年3月)によると、企業がグローバル人材育成に向けて大学に期待する取り組みとして、「日本人学生の海外

留学の奨励」が求められています。同時に、大学に取り組んで欲しい教育として「学生の主体的・能動的学びを促す双方向型授業」を求めている企業が多数ありました。

従って、実学である商学を学んでいる学生は、自ら語学力を高めるために履修科目を工夫すると同時に、長期休みを有効利用して海外に出て、五感で多文化を体験して欲しいものです。

将来、その体験した異文化や多文化を踏まえ、多様性(ダイバシティ; diversity)をマネジメントできる人材として活躍することを期待しながら、編集後記とさせていただきます。

海外留学生数の推移(1983～2014年)

出所：東洋経済academic2016年19頁

